



## 第9回 「わたしの志」 作文

### 【応募状況】

応募数 (編)	小学生	中学生	高校生	計
	463	938	51	1,452

### 【審査委員】 (50音順)

吉川 和夫	山口県教育庁高校教育課指導主事
久保田裕三	防府市立新田小学校長
水津 英三	(公財) 松風会事務局長
前田 昌平	山口大学教育学部教授 (特命)
棟久 郁夫	元山口県立徳山高等学校長

### 【入賞者一覧】

#### \*最優秀 山口県教育委員会教育長賞

菱川 真実 「私の夢は料理人」 光市立周防小学校 5年

#### \*優秀 山口県教育会長賞

小学生の部 水谷 咲希 「私の夢はらく農家」 萩市立明倫小学校 5年  
 中学生の部 榎原 ひなの 「スポーツドクターになるために」 萩市立萩西中学校 3年  
 高校生の部 湊 菜月 「地域とともに～私の目指す看護師～」 山口県立宇部中央高等学校 3年

#### \*優秀 松風会理事長賞

山根 優花 「私の志～松陰先生の『至誠』の心で～」 山口県立山口高等学校通信制

#### \*佳作

岡本 愛衣 「幸せになるお手伝いがしたい」 光市立浅江小学校 5年  
 橋本 響 「自分の夢を追いかけて生きる」 光市立島田小学校 6年  
 野花 みなみ 「わたしの志」 萩市立明倫小学校 6年  
 幾原 遥子 「色であふれた私の人生」 山口大学教育学部附属光中学校 1年  
 有吉 龍夜 「僕が野球をする理由」 下松市立末武中学校 2年  
 吉本 七菜 「空の下の力持ち」 山口大学教育学部附属光中学校 3年  
 池田 結菜 「夢から志へ」 萩市立萩東中学校 3年  
 長尾 詩音 「日々、成長していく」 柳井学園高等学校 2年  
 小栗 あみ 「心指す光へ」 山口県立徳山高等学校 2年



## 第9回 「わたしの志」作文 入賞作品

### ★最優秀 山口県教育委員会教育長賞

#### 私の夢は料理人

光市立周防小学校 五年

菱川 真実

私の夢は、料理人になることです。

でも、まだ私は数回しか料理を作ったことがありません。そして、不安なことがひとつあります。算数が苦手なので、料理で分量をはかるときに、きちんとできるかが心配です。それでも私は、その夢をあきらめたくありません。

なぜ私とその夢を目指しあきらめたくないのかというと、それは二年前の出来事があったからです。

私は当時、岩国に住んでいて小学二年生でした。いつものように学校で授業をしていると、急に岩国のおばあちゃん、学校に現われました。そして、すぐ帰るようにとしたくをさせられ、おばあちゃんに連れられて帰りました。

その車の中で、おばあちゃんに、

「お父さんが事故で亡くなってしまったの。」

と、私は言われ、すぐくしょくをうけました。それから、お父さんのいる病院に向かいましたが、すぐには会えず、れいあん室というところで、やつとお父さんの顔をさわることができました。さわつてみたら、冷たかったです。お母さんもみんなも、涙を流して泣いていました。私は、何が起ったのかわからず、ただ悲しく、いろんなことがすぎていききました。

それと同時に、お父さんの思い出が、いくつもいくつも頭の中に浮かんできました。その中でも、仕事が休みのお父さんが、お母さんのかわりに、ごはんを作ってくれるときがありました。そのチャーハンが私は大好きでした。家族みんながお父さんのチャーハンを食べれば、

「おいしい!!」

「さすがお父さん、ぜつぴんだね。」

「おかわり。」

と、笑顔になります。私は、その楽しいごはんの時間が大好きでした。だから私は料理人になって、お父さんの作っていたチャーハンを作りたいと思いました。

一緒に作りたかったけど、もう作れません。だけど私は、お父さんの作ったチャーハンを食べています。あのおいしい味を覚えていきます。お父さんは、かくし味をいれていました。そのかくし味を料理人になって見つけたいです。そしていつか、お父さんが作ったチャーハンではないけれど、今度は、私が作ったチャーハンでお父さんの思い出がよみがえり、家族みんなが、

「おいしい、おかわり。」

と、言ってくれるようなチャーハンを作りたいです。私は、料理人になるという夢をあきらめません。私は料理人を目指します。

## ★優 秀 山口県教育会長賞（小学生の部）

### 私の夢はらく農家

萩市立明倫小学校 五年

水谷 咲 希

私のしよ来の夢は、両親と同じでらく農家になることです。なぜかというと、両親が働いているのを見てあこがれたからです。今は牛の乳やりを手伝っています。最初は少しむずかしかったけど、何回も手伝いをして今はかんたんに出来るようになりました。でも、まだたくさんやらないといけないことがあると思います。牛が病気にかかったときのお世話、牛がエサを食べやすくするためにこまめにエサよせなどをがんばっていききたいと思います。

私は、両親の牧場をつごうと思っています。そのためには、両親の働いているところをよく見て、教えてもらったりして言われたことを頭の中に入れておこうと思います。その頭の中に入れて言葉を考えて生かしていきたいです。自分でも、いろいろ

ろ努力しようと思います。牛の気持ちを考えたり、様子を見て具合が悪いかを分かるようにしたいと思います。また、私は人の言葉を聞かずに何でもやってしまうので、人の言葉をしっかり聞いて、ちゃんと直したいと思っています。私に出来ることをふやしていこうと思います。私は、らく農家になりたいと思っただけですが、両親を見てあこがれたのもう一つあります。それは、私は動物が好きでお世話をしたいと思っていたからです。牛のお世話は大変かもしれないけど、どんなことがあってもがんばろうと思います。両親はとてもかっこよくて、牛の乳やりをしている時、私もやってみたら、両親は、牛に気持ちをこめて、乳をやっているんだと思いました。お母さんにどんな気持ちでやっているのか聞いてみると、「大きくなあれ。」という気持ちをもっているそうです。私も大きくなってほしいと思つていきます。

私はらく農家になったら、牛を大切に育てようと思います。両親がと

ても大変そうなので手伝いたいと思いました。お父さんが、「やるのがたくさんあるからがんばって。」

と言っていたので、大変なんだと思いました。だからがんばろうと思いました。しよ来、らく農家になれたらいいなと思います。悪いところを直していくところも、牛のお世話もらく農家になるためのしゅぎようだと考えてがんばります。

牛に、

「大きくなあれ。」

「いい子だね。」

と、話しかけながら心をこめてお世話をすることで、きつとおいしいお乳を出してくれると思います。両親だけでなく、おいしい牛乳を飲む人も幸せになってほしいです。

両親にみとめてもらえるように、努力を積み重ねていきたいと思っています。そして、これからもお手伝いをしていきたいと思っています。

## ★優 秀 山口県教育会長賞（中学生の部）

### スポーツドクターになるために

萩市立萩西中学校 三年

#### 兼 原 ひなの

「スポーツドクターになる。これが私の「夢」です。スポーツドクターになつて、多くのスポーツ選手のケガに関わりたいです。」

私が医師の中でもスポーツドクターを目指すようになったのは、三年前に野球観戦に行ったのが原因です。全く興味のなかつた野球でしたが、その日から毎試合テレビで観戦するほど好きになりました。そして、サッカー、ボクシングなど他のスポーツにも興味を持つようになり、また、何度か野球場に行く内に、声援などからファンの選手に対する思いを感じるようになりました。

しかし、今まで何人のスポーツ選手がケガによつて、思い通りのプレーができなくなつたり、引退を余儀なくされたでしょうか。私も、ケガがなければもっと活躍できたのに…という選手を何人も見聞きしてきました。ケガは選手だけを苦しめるものではありません。その選手の家族、さらにその選手を応援していたファンをも苦しめます。このように、一人の選手のケガは多くの人を苦しめます。しかし、逆に言えば、一人の選手のケガが治ることで多くの人が喜びます。苦しみを喜びに変えることができるのです。私は多くの人を喜ばせたいです。「多くの人を喜ばせる。」これが私の

「志」です。多くの人を喜ばせて感謝される人になりたいです。「夢」、スポーツドクターになることによつて、「志」、多くの人を喜ばせることができます。しかし、今も人を喜ばせることはできずと思ひます。例えば、落ちては物を拾うという行動です。この行動では、少しの喜びしか起きないと思ひますが、繰り返し返すことで一人から二人、三人…と「多くの人」になり、「喜び」も二倍、三倍…と増加すると思ひます。私は、スポーツドクターになつて一気に多くの人を喜ばせたいですが、例のようなことの積み重ねも、日常生活で大切にしていきたいと思ひます。

スポーツドクターになるために今しなければならぬことは何なのか、私はまず、なり方について知ろうと思ひ、以前インターネットで調べてみました。すると、医師免許が必要だということが分かりました。だから、大学に入って医学部に入らなければなりません。そのためには、やはり勉強が必要で、スポーツに興味を持つまでは、勉強はしたくないと思ひていましたが今は違います。「志」がある限り絶対に勉強を頑張つて医師免許を取りたいです。

スポーツと出会わなければ、今の「夢」、また「志」は無かつたので、スポーツには本当に感謝しています。しかし、スポーツをする選手がいなければスポーツは成り立ちません。だから、私は選手を支えたいです。ケガで選手生命を絶たれる選手を減らしたいです。私は今までたくさんさんの感動、希望をスポーツ選手から頂きました。特に、野球場に行つたときにある選手が打つたプロ入り初ホームランは忘れられません。その選手は入団時から非力だと言われていましたが、努力をし、打てたホームランだと思ひます。もちろん感動しましたが、

努力すれば結果が出るという希望も頂きました。

次は私がスポーツ選手に感動や希望を与えたいです。私は選手のケガを治すことで感動、希望を与えられたらと思ひます。そして、ケガが治つてプレーできるようになつた選手が活躍することで、その選手自身、家族、ファンの喜びにつながつてほしいです。

スポーツドクターの仕事としてケガの治療の他に予防研究やスポーツ選手の健康管理などがあります。ケガを治す前に防ぐことはとても大切です。ケガを治すと多くの人を喜ばせることができますが、ケガをすると苦しみを感ずることになります。ずっとケガをしなれば、苦しみを感ずるに済みます。だから、ケガの予防や選手の健康管理もしっかりとできるスポーツドクターになりたいです。

スポーツドクターはケガの治療などをするので、確かな技術が必要ですが、まずは治療されるスポーツ選手の治療する側に対する信頼が必要だと思ひます。この信頼がなければ、治療されるときに不安な気持ちになると思ひます。治療する側が信頼されるためには何が大切なのかを考えたら、コミュニケーションではないかと思ひました。コミュニケーション能力を向上させることで、ケガや治療の説明が上手くなり、選手に信頼されるようになると思ひます。だから、今から説明など、コミュニケーション能力が向上する様々なことを意識して行つていこうと思ひます。

私は、「スポーツドクターになる」という「夢」と「多くの人を喜ばす」という「志」を持つています。スポーツドクターになり多くの人を喜ばすためには相応な努力が必要です。しかし、「夢」を叶えるために私は「志」を持ち続けたいです。

## ★優 秀 山口県教育会長賞（高校生の部）

### 地域とともに

### 私の目指す看護師

山口県立宇部中央高等学校 三年

湊 菜月

団塊の世代の方々が75歳以上になられる2025年を見据えた社会保障制度改革の動きが進んでいる。少子・超高齢・多死社会における保健・医療・福祉体制の再構築は、私が志望する看護職が立ち向かうべき大きな現実的課題を明確に提示していると考ええる。

少子・超高齢社会の到来により従来の病院完結型から、医療・ケアと生活が一体化し、地域を基盤とした「地域包括ケアシステム」へと保健・医療・福祉制度は、その姿を大きく変化させようとしている。

ある地域医療に専心している医師の講演でその医師は、「地域の人たちと食事を一緒にして病気の原因が発見できました。」と語った。これからの保健・医療・福祉に必要な視点がそこにはあると私は思った。患者さんの生の営みが、その地域の文化や歴史、自然環境といったものと深く関係していることを印象付けられた。保健・医療・福祉制度は、従来の疾病や障がいの治療・回復を目的とする「医療モデル」優先から、生

活の質に焦点をあて、疾病や障がいがあっても、地域の住まいで自律してその人らしく暮らすことを支える「生活モデル」に大きくシフトしようとしており、そのような社会の変化を学び、私は看護師の中でも「訪問看護師」の仕事に強く興味を持つようになった。

訪問看護師は、「病气や障がいがあっても、住み慣れた家で暮らしたい」「最期は自宅で迎えたい」と望まれる方の要望に答え、先述の「地域包括ケアシステム」の中、その役割は大きなものだと考えられる。また、「家族だけで介護や医療的ケアができるだろうか」「二人暮らしだけ大丈夫？」と不安に思うことも多いはずだ。そんな時に頼りになるのが訪問看護ではないだろうか。訪問看護の強みは、地域で暮らす赤ちゃんから高齢者まで全ての年代の方に、関係職種（保健師・助産師・理学療法士等）と協力しあつて、一人ひとりに必要な支援が行えるところだ。私の生まれ育った宇部市で本当に親身になって高齢者の方々に抱える方々と深いコミュニケーションを取りながら、快方への道のりを共に歩む看護師、それが私の理想の看護師だと思ふようになった。

看護師を目指すきっかけは、祖父の突然の入院であった。祖父は、10年前に脳梗塞で長期入院をしたことがあり、二度目の入院と年齢を重ねたことにより、病院に行く不安になると言っていた。入院する際も、在宅医療を強く望んで

いるにもかかわらず、訪問看護を受けることができなかった。思うように過ごせず、家族が側にいることのできない状況が、祖父には耐え難かったと言っていた。退院し、祖父が家に帰ってきた時、祖母をはじめ家族全員が安心したのを私は記憶している。

身近な者の看病がきっかけであった私にとつて、地域と結びついた体制は、当然のことであり、また、そこには私の理想の看護師の姿がある。

「地域包括ケアシステム」の構築が進み、療養の場が医療機関から自宅・グループホーム・介護施設など、暮らしの場に移行していく時、患者さんと家族が安心して、また、前向きな気持ちを持つて、暮らしの場に戻っていくことができるように、看護師は、様々な角度から患者さんの自立に向けて援助し続けなければならぬ。そのためにもたくさんの専門的知識と広い視野を身につけるため、勉学に励んでいく事を今考えている。

日本の超高齢化の速度は世界一であり、その中でも山口県は上位に位置している。このような状況にあるふるさとのために、看護師としてかわりが持てたらどんなにか充実した人生を送れることだろうか。

フロレンス・ナイチンゲールの言葉に「女性には誰でもが看護師なのである。」という言葉がある。受験を前にしている私をこの言葉は強く励ましてくれる。

## ★優 秀 松風会理事長賞

### 私の志

#### 松陰先生の「至誠」の心で

山口県立山口高等学校通信制

#### 山 根 優 花

私には忘れられない出来事があります。三年前、全日制の高校に入学して不登校になりました。家に引きこもるようになり、当時先の見えない真つ暗なトンネルを歩いているようでした。そんな日が続く中、家族の勧めもあり、通信制高校に転学することになりました。通信制では週に一度スクーリングがあります。その授業に参加して単位を取ることが出来ませんが、スクーリングに行くことが出来ませんでした。数日前から腹痛などを起こし、体調が悪くなるのです。不登校を経験してから人の目が気になり、外に出るのも怖くなりました。自宅から徒歩十分の地元のスクーリング校は通学する生徒が多いため、どうしても行けません。そのため、両親の運転により、車で二時間かかる生徒数の少ない萩の高校に通って行ってもらったことになりました。萩にしたのは私の尊敬する松陰先生の生まれた町だったことも大きかったように思います。その萩の高校に初めて行った冬の日、重い足どりで車に乗りましたが、道中体がきつくなり、学校に着いても教室には入れませんでした。このままこうしていても下がった気持ちは変わらないだろうからと、おそらく松陰先生も気分転換のためにしばしば訪れたであろう菊ヶ浜を見に行くことにしました。

夏なら海水浴客などで賑わっているその海は誰一人いませんでした。冬の海を間近で見たのは実はそれが初めてでした。しばらく母と二人で言葉を交わさず、ただただ海をじっと見ていました。大きな波がゴーゴーと押し寄せてお腹が響くようで、鋭く冷たい風で頬が冷え、空も海も暗く灰色の世界が私たちを包み込んでいたように思いました。しかし、そんな海を見つめているうちに何故か心が温かくなったのです。この海に守られているようで安心できたのかもしれない。海と空と隣の母と私は別世界にいるようでした。人の目を気にせず本来の自分であることが出来た感じがしたのです。私はそれから砂浜に流木で自分の名前を書いても繰り返し消して、それを何度も繰り返し書きました。今振り返ってみると、その時の自分は一番悩んでいたと思います。自分の名前を書き、消して新たに書くことで、生まれ変わる意味を表していたのではないかと思えます。「自分が変わりたいか」として、砂浜に名前を書くことで自分の存在がここにあることを自分自身で確かめたかったのかも知れません。そして私は次の授業から出席することが出来るようになったのです。不安もありましたが、それよりも大丈夫だという自信の方が大きかったように思います。もしかしたら松陰先生も隣にいて、私の背中をそっと押してくれたのかも知れません。

私は真冬の大きな海に大きな勇気をもたらしました。そして一歩が踏み出せたのです。辛い気持ちを抱えながらも、気持ち切り替え、前を向いて歩き出す事がどんなに大変なことか今の私には分かりません。そしてそれが大切だということも。一歩が踏み出せなかった私だから分かる一歩の重さです。皆同じ道を進むわけではありません。時に道草をしてもその経験から自分にとって大切なことを見つかることもあり。私は今まで自分自身の事について考えました。考え続けていて悩みが増えました。しかし、悩んで自分に向き合えたからこそ、得ることもありました。そして将来の夢が明確になったのです。臨床心理士になるという夢です。大学で心理学を学び、自分の経験を今度は誰かを救うために生かしたいと思えます。またこの経験を家族にいつも支えられていたことに気がつきました。私は支えられて生きてきました。不登校になった日からずっと傍で見守り、支え続け、共に悩み苦しんでくれた家族を私は大切に思います。家族や今まで支えてもらった人から自然と教わった「人を思いやる優しい気持ち」を私も誰かに与えられる人でありたいと思います。私が自分らしく自分の道を進んでいくことで家族に支えてもらった恩返しをしたいのです。

萩のスクーリングの授業を無事終えると、尊敬する松陰先生に毎回お礼と、次回の決意をお伝えするために松陰神社にお参りしています。私が松陰先生を尊敬する理由は先生の「至誠」という言葉が好きだからです。臨床心理士は人と真摯に向き合い、傾聴する仕事と言えますが、至誠をもって、まごころを尽くして人と関わりたい。そうすること、私が救いたい人にまごころが届けられたらと考えます。人が苦手な私が人と関わる仕事をしたいと思っています。人間関係で苦しんできた私だから救える人もいるし、伝えられる言葉もあると思います。人との悲しみを悲しい過去で終わらせないように最後は人対人で元気にしたい、そして私も私を支える誰かも、人と通じることで世界を広げたいと思います。